白鬚神社

はじめに

白鬚神社本殿の説明に入る前に、神社について一般的な説明をしましょう。神社信仰のかたちは、古くには色々なものがあったことと思われますが、それに著しい変化が起ったのは、農耕特に稲作の発達にともなう、経済生活の変化や社会組織の進歩によるものと考えられます。人びとにとっては、とりわけ作物の豊饒への願いが強かったので、豊作か不作かを左右する自然現象や宇宙、山岳、樹木および岩石などを崇拝することになったのでしょう。しかも、つねに身近にある山や森や岩が対象に選ばれていたものと思われます。また、人びとが共同生活をし、集団化して社会が発達してくると、祖先や古墳も信仰の対象とするようになりました。

共同生活を構成する人びとは、ときどき一箇所に集まって祭りを行いましたが、神は、一定の場所に常にいるのではなく、その祭りの時だけその場所に現われると考えられていましたので、この時代には本殿を必要としませんでした。ですから、崇拝する山や森や岩などの自然物を御神体とみなし、それらの自然を遠くから拝んでいたのでしょう。現在でも、奈良県の大神神社、長野県の諏訪大社上社本宮、埼玉県の金鑽神社などは、いずれも本殿を持たず（背後の）山を拝んでいます。また、これより規模は小さいものですが、本

白鬚神社社頭

53．2．28

財団法人　滋賀県文化財保護協会

殿の背後の自然物や、床下にある石や井戸などを神聖なものとしている神社が各地にあります。大津市坂本本町にある日吉大社摂社の樹下神社もそうです。それらには山岳などのような壮大さはありませんが、みな、生活の場の身近にあるものを対象としているものです。

さらに進むと、自然物に神性の宿るものから、人工のものに置き換っていきます。人工のもので最も素朴な例が１本の独立した柱で、これは、神が姿を現わすときの依代と考えられていたものでしょう。この柱は、建物の中の一材料としてのものではなく、それだけで完成されたもので、人工の営造物としては最も単純な姿ですが、神の象徴としての性格を完全に備えています。

次いで、建物が出現してきます。一つは、建物を神の宿る象徴とみなすようになるのですが、それは普通の住居のようなものでなく、持ち運びのできる程の小規模のもので、祭りの時期だけに設けられたものと思われます。そうしたものを元の形として造られたものがいまの流造や春日造の系統と考えられています。もう一つは、神の象徴としての自然の一部や独立柱の他に、鏡や玉や剣などを神体としてまつるようになり、これらを収蔵する建物が必要となって来たものです。

一般的に神社建築が寺院建築などと異なる点は

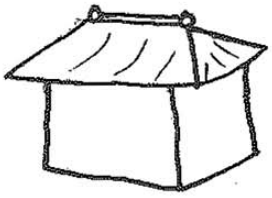
(1) 屋根を寄棟造としないこと
(2) 屋根を瓦でふかないこと
(3) 土壁を用いないこと
(4) 装飾が質素であること

であるといわれています。寺院の建築が、比較的規模の大きいものであったのに対して、神社建築は、自然界の１個の石や１本の柱にも神を見いだしたように、規模の小さいものをもって神の宿るところの象徴としたことによるのでしょう。しかし。神道が仏教と混じり合い調和することによって、平面が複雑になり、規模も大きくなっていき、組物や曲線が取り入れられてくることになります。

流　造

春日造

入母屋造


寄棟造

白鬚神社について

湖西の国道161号線を、比叡、比良の山並みを左手に眺めながら北に進むと、北小松のあたりで道は急に琵琶湖に接近します。白砂青松の水辺をさらに進むと、湖中に朱塗りの鳥居が見えてきます。ここが白鬚神社です。国鉄湖西線が裏山をトンネルで通過するようになるまでは、江若鉄道の郷土色豊かな気動車が湖岸をのんびり走っていましたが、いまはその軌道敷も国道に拡張されて自動車が頻繁に通り、神社は騒音の中にあります。

裏山には古墳が点在していることから、この地は相当早くから開けていたと考えられますが、この神社の始まりは、社伝によると垂仁天皇25年に皇女倭姫が社殿を建てたと伝えるだけで、詳しいことは判りません。祭神は猿田彦命で、長寿、航行の安全および農耕の神として、世間の人々の崇敬が厚く、末社は現在わかっているだけでも150社あります。また白鬚講も江戸時代から明治時代にかけて盛んに参拝し、北国街道の分岐点には７本の道標が残っています。

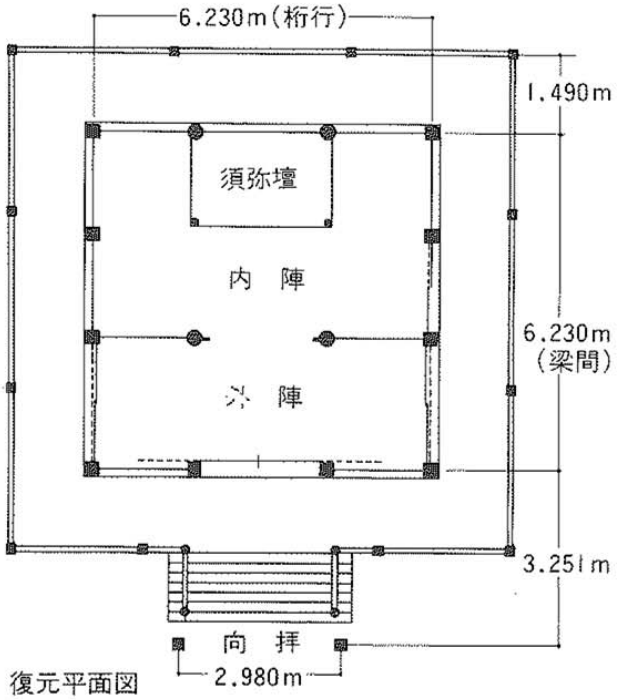
本殿について

白鬚神社の本殿は、昭和13年７月４日に国

内陣板壁の墨書

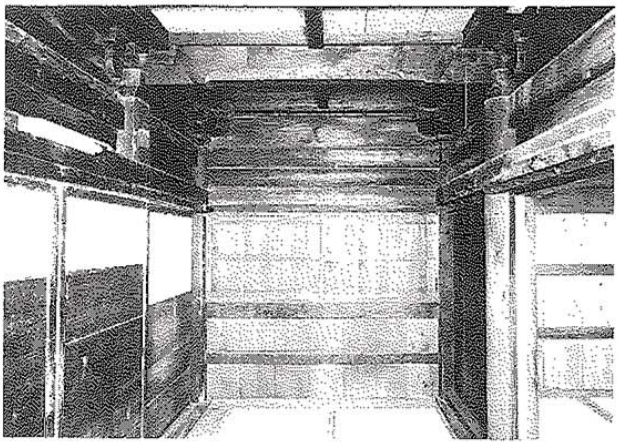
の重要文化財に指定されました。その時の指定内容の説明に「当代の社殿としては比較的素朴にして、多分に古調を帯びたもの」とありますが、このことが、この建物の特徴を端的に表現しています。

この本殿は、神社にある棟札や、本殿内陣の板壁にある墨書によりますと、桃山時代の慶長８年（1603）に再建されたもので、今日までに375年たっていますが、それ以前の本殿の規模や位置はわかりません。再建については、銘文によりますと、豊臣秀頼の命令により、片桐且元を奉行として、作事奉行には雨森長助、直行の２人がなり、また大工棟梁には播州（兵庫県の南部地方）書写山坂本の人である藤原朝臣与三兵衛があたり、同年の６月11日に立柱、同月13日に棟木を上げています。この時に鳥居、伊勢両宮、若宮等の末社や地蔵堂なども一緒に建て、同月24日に本殿の宮移しをしたことがわかります。このように、立柱から宮移しまでの期間が14日間と余りにも短か過ぎるので、工期に疑問が残りますが、本殿の様式や手法は桃山時代の建築に相当しています。棟札には、神主惣左衛門、久次に続いて、別当（注１）山門本院南谷浄教房法印実善とあることから、ここが天台宗延暦寺の支配下にあったことがうかがわれます。

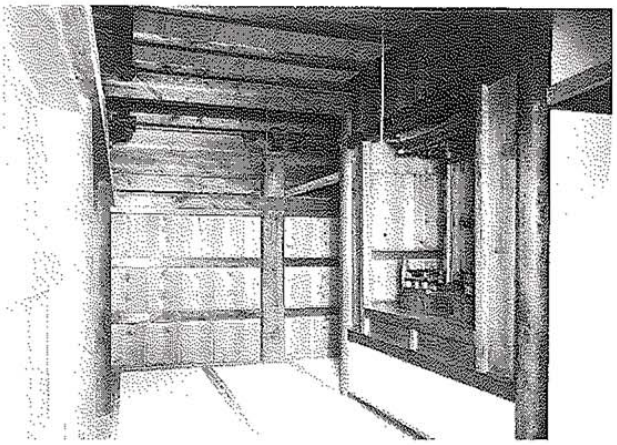


復元平面図

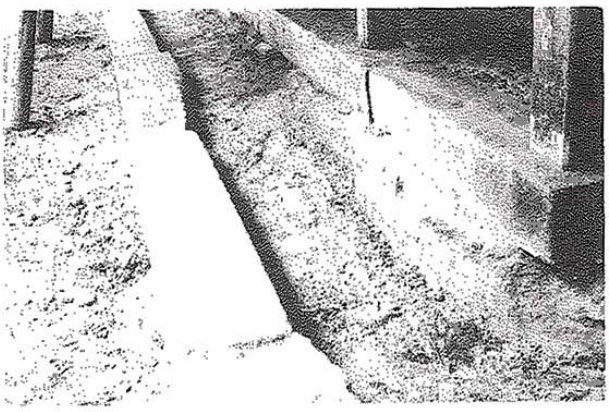
平面は、桁行を正面として南を向いて建っています。桁行３間、梁間３間の正方形で、前より１間を外陣、うしろ２間を内陣とし、内・外陣の間仕切境の中央間には板扉を吊った跡があります。また、本殿が建てられた時



本殿内部・外陣



本殿内部・内陣

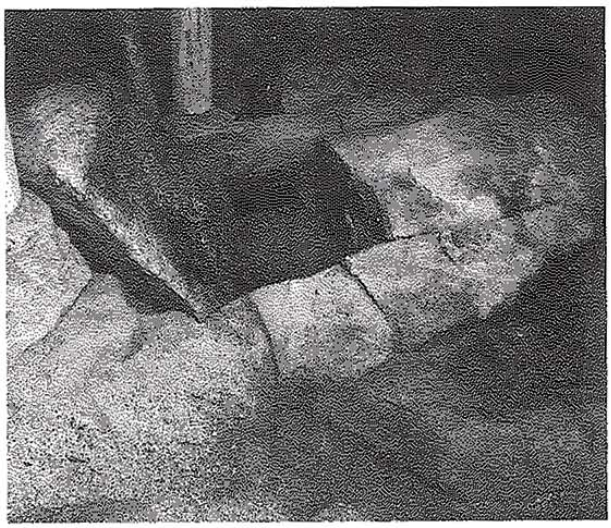


縁回りの礎石

には１間の向拝（注２）が付いていましたが、明治12年（1879）に、本殿の前にあった拝殿を、元のものより規模の大きい立派なものに建て替える際、向拝柱を拝殿柱に共用して両殿をつないでしまいました。そのため、向拝の軒先を切り、両殿のつなぎの部分に床板を張っているので、本来は７段ある向拝の階段は床上に３段しか見えていません。

現在、地上に見えている礎石は、安永７年（1778）に縁回りを大修理した時のもので、慶長再建時の礎石の上に約30㎝角の石を積み重ねて高くしています。これは、降雨のたびに裏山の土砂が流出して柱の根元が腐るので改良したものと思われます。また、北西隅の身舎柱は石の斜面に立っていてはなはだ不安定な状態になっていますし、床下の中央付近には長さ 2.5ｍ、幅２ｍ、厚さ30㎝の平たい石が２段になっています。その頃の土木工事の技術であれば、裏山を削って整地すること

解体修理状況

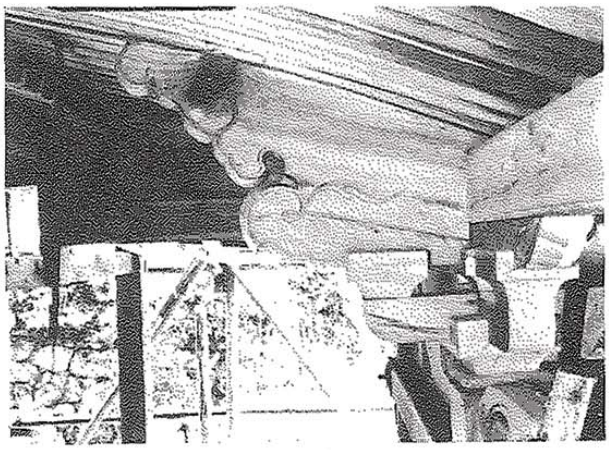


床下の大石

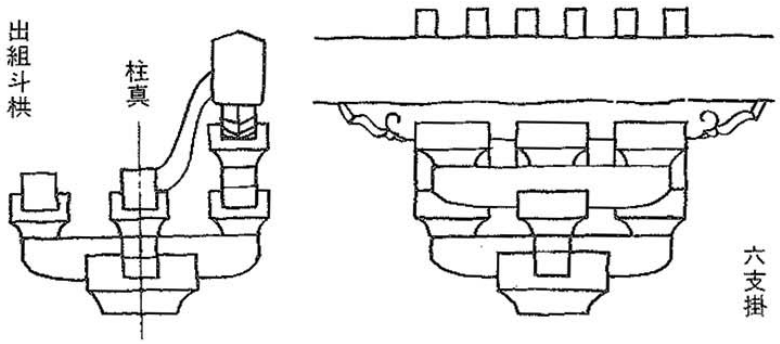
は可能であったと思われますが、前述のような位置に本殿を建築しているのは、それらに何らかの宗教的な意味があったのかも知れません。

本殿の柱は、大部分が角柱ですが、内・外陣境の２本と背面中央間の２本とを丸柱とする特色のある構成をしています。内部空間でも特に内陣部分は、ごく簡素なものですが、梁行に虹梁を２本架けて空間を力強い荘厳なものとしています。須弥壇は、柱の取り付き方などからみると、比較的早い時期ではありますが後世に設けられたもののようです。

斗栱は、神社の本殿には珍らしい出組斗栱で、和様（注３）を基本としていますが、渦形の曲線をもつ実肘木や木鼻を用いているところなどは、禅宗様（注４）の影響を受けています。また、軒先に支柱（縁束を兼ねてい



向拝の内上部

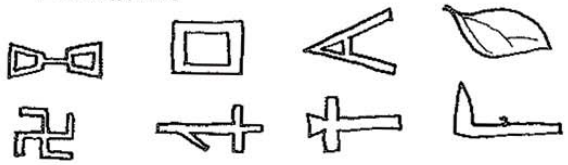


る）をもつ構造で計画されたものですから、軒の出が深くて建物を落ちついたものにしています。斗栱は六支掛（注５）を採用しています。向拝の打越梠は、向拝桁より内側では起り外側では照っている、いわゆる〝照り起り〟で、軒を少しでも軽やかに見せるための細かな心遣いが見られます。これと同様な例が、福井県小浜市の羽賀寺本堂（文安四年・1447）にあります。

小屋組の番付は、南西隅を基点として、常香盤番付を用いています。また、部材の継手には、挿図のように絵をのみ彫りした絵番付を使っています。

屋根は、仏堂に似た入母屋造で、今回修理する前は檜皮葺（檜の皮でふいたもの）でしたが、本来はこけら葺（本シリーズ８彦根城馬屋参照）であったようです。当神社にある享保７年（1722）の社寺改めの記録にも、本殿、拝殿および境内の他の建物もこけら葺と書かれています。また、本殿、拝殿を現在の形に改造した時もこけら葺でしたが、雨もりのため、わずか19年後に檜皮葺に改めて現在に至ったものです。今回の修理は屋根葺替および部分修理でしたので、従来どおり檜皮葺としましたが、本来は、拝殿を本殿から切り離して向拝の軒先も復元し、屋根はこけら葺にすべきであると思います。

小屋組絵番付



妻は、力強い虹梁の上に大瓶束を立て、堂々としています。懸魚の内側に打下村大工惣八郎の墨書があることからみると、部分的な修理は地元の人がしていたようです。

棟札やその他の資料

棟　札

ここで、社蔵の史料や、今回の修理工事中に発見したものをまとめてみましょう。

当神社には大小７枚の棟札がありましたが、中でも長さ1.63ｍもある大きい板には、全面に長文の縁起が墨書されてあって、豊臣秀吉の没後、若冠６歳で跡を継いだ秀頼が10歳の時に普請したもので、片桐且元の署名と花押（書き判）があります。また裏面には雨森長助の署名と花押があります。なお、この棟札とよく似たものが竹生島の宝厳寺にもあって、これも慶長８年の同寺観音堂再建に関するもので、且元の署名と花押があり、裏面にも同様に奉行雨森長助の署名と花押があって、筆跡もここのものと同じようです。

次の１枚は、長さ

白鬚神社側面（左・本殿　右・拝殿）

１ｍ足らずのもので、本殿の再建と同時に鳥居、伊勢、八幡三所、若宮、地蔵堂、御供所および拝殿の建築の記載がありますが、内陣の板壁の墨書には本殿以下御供所までしか書かれておらず、拝殿はありません。また、寛永元年（1624）林鐘（陰暦６月）上旬云々の棟札があって、それには拝殿造営の記事が見られますから、慶長８年に本殿とその他の境内建物を同時に建て、拝殿のみを21年後に建てたことになりますが、これは断定できません。

残りのうち３枚は、長さ45cm前後のもので、伊勢、高良、若宮など境内末社の慶長再建を裏付ける資料です。また、これらには寛永４年（1627）に行われた第１回目の屋根替のことが併記されています。小屋内から発見されたこけら板には別当第九実宣代と書かれてあり、これからも延暦寺との関係がうかがわれます。また、６月７日に工事に着手し７月２日に完了したこととともに、職人２名の住所と氏名の記事がありますが、その住所の今在家や南市はいずれも現在の高島町内です。

以上、白鬚神社本殿などについて概略を述べましたが、１棟の建物を修理すると、それらに伴う調査により色々な事柄がわかって来て興味深いものです。　（村田信夫氏提供）

注１　神宮寺を支配する僧侶

注２　社殿や仏堂の正面（または背面）に突き出て、上部に屋根、下に階段のある構造で、参拝人の礼拝のためのもの。御拝（ごはい）ともいう。

注３　奈良時代から平安時代にかけて、中国の唐を中心とする建築様式がわが国に移入され、日本的に一応完成した様式。

注４　鎌倉時代に、栄西禅師によって中国から伝えられた建築様式。唐様ともいう。

注５　一定の間隔で配置された棰との間隔で、それを受ける斗栱の大きさが決定される木割の一つで、棰６本分の幅と斗栱の三ツ斗の最外部の幅とが同じ大きさの割り方。　（挿図）